

寄付のススメー寄付月間スタートに寄せて

寄付は、思いやりの心をお金に乗せて循環させるものであると同時に、志を持った市民が、自らの手で社会を変えていく意義を実感できる貴重な機会でもある。民主主義の育成の一環として、寄付文化醸成を長年推進してきた日本フィランソピー協会も、寄付文化を根づかせていこうという、この機運の高まりをさらに発展させるべく、寄付について、あたためて考える機会としたい。

2015年から、12月の1カ月

間を、寄付について考え、アクションを起こす「寄付月間〜 Giving December〜」とする取り組みが始まる。多くの人が寄付に関心をよせ、行動するきっかけとなること、寄付する側と受け取る側の、よりよいコミュニケーションが深まることを目指す。

寄付月間推進委員会委員長として、東京大学総長時代に寄付推進に取り組んだ経験をもとに、NPO、大学、企業、行政、国際機関から幅広く集った推進委員たちを励ます、株式会社三菱総合研究所理事長の小宮山宏氏に話を聞いた。

続けていれば
文化はついてくる

「いよいよ「寄付月間」が始まります。「日本には寄付文化がない、寄付は根づきにくい」とも言われますが、寄付文化を醸成するために、次の一歩を踏み出すうえで何が大事でしょうか？」

小宮山 アクションしかないと思いますね。実績をつくっていくことです。何かを根づかせていくには、最終的に文化や風土というものをつくる必要があるのですが、文化がぼつとできるとは考えにくい。地道な努

途絶えていた寄付文化を 再び取り戻す好機

株式会社三菱総合研究所理事長
寄付月間推進委員会委員長

小宮山 宏氏

こみやま・ひろし

1972年東京大学大学院工学系研究科博士課程修了後、東京大学工学部長等を経て、2005年4月に第28代東京大学総長に就任。2009年3月に総長退任後、同年4月に三菱総合研究所理事長に就任。2010年8月には、サステナブルで希望ある未来社会を築くため、生活や社会の質を求める「プラチナ社会」の実現に向けたイノベーション促進に取り組む「プラチナ構想ネットワーク」を設立し、会長に就任。著書に『課題先進国 日本』（中央公論新社）、『日本「再創造」』（東洋経済新報社）など多数。

力が少しずつ実って、やがて「文化がついてくる」のだと私は思っています。文化がない時のアクションは本当に大変ですが、やるしかないですね。

— まずはみんなでやること、ですか。

小宮山 そうです。絶対成功する方法というのは、成功するまでやめないことです。やっついて、これは違

うと思ったら軌道修正すればいいし、いいと思ってやっついていくことは、とにかく続ける。そのうち成功するものです。

— 今回「寄付月間」が始まることの時代的背景を、どのようにみておられますか？

小宮山 寄付文化醸成に、フェーズ1、2、3のような段階があるとしたら、今、変化する最初の地点に来たのかもしれない。「日本には寄付文化がない」という説も、寄付というものをどう考えるかですね。

たとえば、明治の頃、土地の素封家が地域の優秀な子どもにお金を出して勉強させることなどは普通になりました。それは明らかにフィランソピーですよ。お寺の寄進も寄付。高度成長時代に会社が共同体の主体になった結果、そういった状況に変化が生じたのでしょう。

今、公共のために本当に寄付が必要な時代になってみると、「日本には寄付文化がなかった」ではなくて、むしろ「途絶えていた」と言えるのかもしれないですね。

— 「途絶えていた」と考えると、日本の寄付文化について新しい見方ができそうです。

小宮山 1950年頃から約30年間、日本がまだ途上国で急速に発展していた時代は、国の税収は増加の一途。増えた税金をどのように「公共」に回すかという、非常に重要な時代でした。いつの時代も公共は必要ですが、成長している間は寄付で公共を賄う必要がなかった。

しかし国が成熟すると事情は違います。先進国は基本的に政府にお金がありません。税収が増えずに支出、年金等の義務的経費が増えて、公共のためのお金が欠乏します。ですから、いまこそ日本ではフィランソピー、寄付が必要なのです。

— 途絶えていたものを見直すいい機会ですね。

1%の寄付を当たり前の社会に

小宮山 私は、収入の1%を寄付する「1%運動」というものを考

えています。日本にも年間100億
円を稼ぐ人も出てきていますが、そ
ういう人は1億円を寄付する。年収
1000万円の人は10万円。小遣い
を1000円もらった子どもは10
円。そのくらいのは当たり前と
いう社会をつくりたいですね。

1%は目安で、実は累進だとも
思っています。年に100億円稼ぐ
余裕がある人は5%くらい寄付す
る。米国には、ビル・ゲイツやウォー
レン・バフェットのように大変稼ぐ
人がいるわけですが、バフェット
は「50%クラブ」をつくりました。
もちろんお金持ちになるのは本人の
能力があるからですが、1人で偉く
なったわけではなく、社会のさまざ
まな人のおかげを受けて、運を得た
という面もあるわけです。ですから、
生涯に稼いだお金の50%を寄付する
ことは当たり前なのですね。

—寄付が当たり前の社会を目指して
いくと。

小宮山 子どもたちにも、小さい頃
から寄付は当たり前だと教えてい
く。ただ、大事なのは自分の思いで
寄付先を決めることです。寄付と税

金の違いはそこです。東大の総長時
代には、いろいろな方に寄付をいた
だきましたので、一代で財を成した
ような方々の思いを知りました。社
会にお金を出したくないのではな
く、税金としてどう使われるかわか
らないのが我慢できないとのことだ
した。

—同じお金を出すなら、自分の思い
を託したいということですね。

小宮山 自分が共感することに寄付
をするということですね。そうすると、
子どもの頃から、社会の何にお金を
出したいのかを考える習慣は、とて
も重要なことかもしれない。

—当協会でも、小さい頃から寄付に
ついて教える「寄付育」を推進して
いますが、募金を何に使うのか、ど
こに寄付するのか考えることを、と
ても大切にしています。

—これだけ社会や個人の考えが多様
化すると、寄付に託す思いも、寄付
の受け手の取り組みもさまざまです。

小宮山 たとえば、地域づくりでが

んばっているところの状況もいろい
ろですね。北海道のニセコ町はパ
ウダースノーの活用で、大変成功し
ている。石川県の先端にある珠洲市
は、過疎ですが、金沢大学と連携し
て人材育成事業に取り組んでいる。
兵庫豊岡市は有機農業とコウノト
リの復活で、有機農業自体も競争力
を持ったし、観光客がものすごく増
えている。やっていることは場所に
よってまったく違う。その多様性を
どうファイナンスしていくかです。

—国は中央集権で画一的な事業の音
頭取りは得意ですが、国が多様な必
要性を支えるのは難しいことです。
これからは、人によっても場所に
よってもまったく違ったクオリティ
の高いライフ生活、人生を求めて
いく時代に確実に入ります。最後は、
個々の誇りある人生に行き着きま
す。そのあり方は非常に多様です
からね。そのために必要なお金を誰
が出すのかといえは、やはり寄付で
はないかと私は思うのです。

—公共の必要性を支えるのが寄付な
のですね。

小宮山 寄付というのは「恵んであ
げる」ものではないんですね。誰し
も、社会のために役立ちたいと思っ
たことはあるはずですよ。でも自分
はできないこともある。であれば、そ
れに取り組む人たちを支援しよう、
そういうことです。でもいきなり、そ
のような発想を持って言われてもな
かなかできないから、子どもの頃か
ら訓練をしていけるといいですね。

—大流行の「ふるさと納税」では、
寄付の物的なメリットの部分が強調
されています。

小宮山 戦術としてはいろいろとあ
るのでしようが、基本的に寄付のメ
リットは「社会貢献しているという
心」ですよ。1万円の寄付で2万円
相当のものがもらえる代わりに、も
し誰かが損することになるなら、そ
れは寄付ではありません。

—これからは心の時代。地域の活性
再生可能エネルギー、高齢社会のた
めのインフラなど、成熟社会になっ
ても欲しいもの、必要なものはた
くさんあります。でも国はもうファイ
ナンスできない時代なので、みんな

が一緒になって幸せをつくるというのが寄付なのだと思います。

この「みんな一緒にやる」というのが大事です。かつては「水田」での農作業、高度成長時代は「会社」でした。それらが、みんなの絆を生んだわけです。では、いまそれに代わるものは一体何なのか？私は、公共のために寄付という形でお金を集めて、みんなで新しい「プラチナ社会」(※1)をつくることだと思います。みんなが本当に必要なを感じる、社会的意義があること、大人も本気になれることならできるだけ、新しい絆をつくるという意味でも、とても重要だと思います。

相手の思いを実現する お手伝いだと誇りを持つ

—参加の呼びかけは難しくもありません。お金を無心している感じではなく、運動そのものに参加してもらえよう呼びかけるのに大事なことはありますか？

小宮山 私はある時、寄付に対す

る意識が変わりました。東大の工学部長時代、いろいろと資金が必要で、仲の良かったマサチューセッツ工科大学(MIT)のチャールズ・ベスト学長(当時)に、どうやって寄付を集めているか聞きました。そうしたらMITにはファンドレイザーが135人いると。そんなにいるのかと言ったら、ハーバードには450人いると。そんなに雇うのかと聞いたら、ファンドレイザーは自分の給料より高額の寄付を集めてくるから何人いてもいいんだと(笑)。

米国人らしいわかりやすい話でしたが、その時に、寄付は物乞いではなく、相手の社会貢献のお手伝いをしているんだと意識が変わったのです。それで、東大にも専任のファンドレイザーのグループをつくりました。ベスト学長に習って、「寄付を集めるのが仕事、誇りをもって臨め」と。

—あなたに代わって、あなたの思いを実現しますよと、誇りをもって伝えるのですね。

小宮山 そうです。私が初めて大きな寄付をいただいたのは、ある企業の創業者の方からで、当時東大にかけたクリーンルームを持つ建物の建築資金でした。念願が実現するので「本当にありがとうございます」と申し上げたら、その方が「お礼を言わせていただくは私の方です」と。「自分はたまたまこういうお金を手にしたわけですが、それをこんなに有意義に使わせていただけるのですから」とおっしゃっていただきました。さまざまないがあつてのお言葉ですが、寄付をしていただくというのは物乞いではないのだと実感しました。その後も、その種のことをおっしゃってくださいました方は多いです。

—寄付を受ける側も、相手の社会貢献のお手伝いをしていると自信を持っていくことですね。

小宮山 寄付は、多様な公共を自分たちの力でどうつくっていくかということです。寄付した人も誇りでしょう？寄付で実現させていたことを発表することも大事で

すね。米国の大学は建物に当たり前のように寄付者の名前を冠しています。社会貢献するのが当たり前、寄付に誇りを持ってみんなが一緒に取り組む社会にならないとダメですね。

—大事なことが見えました。寄付を受け取る側も寄付する側も、大事なのは誇りですね。当協会の「まちかどのフィランソロピスト賞」も18回目になります。日本全国には、志を持って寄付する方が大勢おられることを実感します。「寄付月間」をきっかけに、その輪を広げていきたいと思います。本日はお忙しいなか、ありがとうございました。

※1 小宮山氏が提唱する、エコで、高齢者も参加でき、地域で人が育ち、雇用のある、快適な社会。その実現を目指す全国規模の連携組織がプラチナ構想ネットワーク。 <http://www.platinum-network.jp/>

インタビュー 本誌編集担当 若林朋子

【2015年11月10日 三菱総合研究所にて】